○記入用紙

JWUシーズ

※＝入力必須項目

研究者名※	佐々木雄大 SASAKI Yuta	学位※	博士(文学)
所属※	人間社会学部 文化学科	職名※	講師
連絡先	sasakiy@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/sasakiyuta		
研究分野※	人文学		
研究キーワード※	西洋哲学、西洋倫理学、聖なるもの、エコノミー、有用性		
共同研究・競争的資金等の研究課題	・家族・経済・超越――近現代日本の文脈からみた共同体論の倫理学的再検討（科研費・基盤B・研究分担者・2017～2021年3月） ・「聖なるもの」の起源と現代の生における可能性（上廣倫理財団 研究助成 2018～2019年） ・西洋思想におけるエコノミーの概念史的研究（科研費・若手B・2015～2017年）		
社会貢献・産学官連携活動等	・NPO法人国立(くにたち)人文研究所理事(2016～)		
受賞歴	・特になし		

研究領域	哲学・倫理学	(SDGs)
研究テーマ※	〈聖なるもの〉概念の限界と可能性	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 一般的に〈聖なるもの〉とは宗教を本質的に規制する概念であり、人間の生に意味を賦与する至上の価値であると考えられている。しかし、近年、「宗教概念批判」の文脈において、〈聖なるもの〉概念に対してもまた、多くの批判が提出されている。 こうした状況を受けて、本研究の問いは、〈聖なるもの〉はたんに空虚な概念であって、もはやいかなる学術的な意義ももちえないのか、それとも、現代にあってもなお、人間の生にとって何らかの意義をもちうるのか、もしその可能性があるとすれば、それはどのような意味においてか、ということである。 本研究の目的は、「宗教概念批判」を踏まえて、〈聖なるもの〉概念の限界を画定した上で、合理化・世俗化が徹底したかのように思われる現代社会にあって、それでもなお、〈聖なるもの〉が社会を分析するために学術的に有効であり、人間の生にとって深い意義をもちうる可能性を示すことにある。 具体的には、①まず、〈聖なるもの〉概念の起源(「タブー」「神聖」等)を特定して、その本源的な意味を剔抉する。②次に、〈聖なるもの〉理論の学説史(社会学年報学派、宗教現象学、聖社会学等)を整理すると同時に、それに対する批判(アガンベン等)の妥当性を精査する。③最後に、「生命」「権力」「消費」(浪費・消尽)という3つのテーマを主要な参照軸として、現代社会における〈聖なるもの〉概念のあり方を検討し、その可能性を提示する。 【応用例、研究の展望】 本研究の議論はたんに、〈聖なるもの〉の概念史や狭義の宗教論の研究にとどまらず、生命倫理学における「生命の神聖性」(Sanctity of Life)、現代思想における「生政治・生権力」論、そして、社会学における「消費社会」論と関連し、現代の人間の生にとって、十分に有意義な議論だといえる。 【研究方法の特色】 〈聖なるもの〉をめぐる議論がフランスやドイツを代表とするヨーロッパを中心に展開されてきたのに対して、「宗教概念批判」は主にアメリカの宗教学周辺から出てきた議論であるため、ヨーロッパとアメリカ双方の議論を等分に見渡し、比較検討することによって、「宗教概念批判」の議論の文脈を踏まえた上で〈聖なるもの〉の可能性を探究するという点に、本研究の特色があるといえる。	
本研究関連特許・論文等	・佐々木雄大『バタイユ エコノミーと贈与』講談社、2021年。 ・佐々木雄大「バタイユにおける聖と俗の対立の問題」『倫理学年報』第 67集、2018年、203-217頁。 ・佐々木雄大「〈聖なるもの〉のためのプロレゴメナ」『ニュクス』第5号、2018年、10-27頁。	
共同研究・外部機関との連携への期待	・宗教学・文化人類学・社会学との学際的研究	